

感染症はスティグマ(烙印)か？

国内における新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の第3波により、大阪もCOVID-19専用の病床がかなり逼迫しています(11/24現在)。第3波では、いわゆる「夜の街クラスター」が感染拡大の原因ではなく、より感染が広まっていることが分かります(11/24時点で経路不明者が68.7%)。第1波、第2波の時よりも、多くの人にとって「Clear and Present Danger (今、そこにある危機)」となっています。実際に、第3波が始まり、職員が濃厚接触者となったという報告がこれまでよりも増えております。

当院でも、職員が感染することを予防するため手指衛生やマスク着用を呼びかけており、会食などの自粛の要請をしていますが、ここまで感染の規模が大きくなれば、個人レベルで十分な注意をしても、COVID-19に罹患する可能性が以前よりも高くなってきます。このような状況においては、予防行動を取るだけでなく、発熱等の症状が出た、濃厚接触者になったかもしれない、などの報告・相談をいち早くすることが大切です。



左の図は、神戸市が感染者やその家族、医療従事者とその家族への差別的な出来事が相次いだことから作成されたポスターです。当院の職員でも、差別的な扱いを受けたとの報告があります。本年3～4月に行われた意識調査で、「感染する人は自業自得だと思うか」との質問に、「どちらかといえばそう思う」「やや～」「非常に～」と答えた人が11.5%いました(2020.6.29読売新聞報道)。こうした自己責任論や差別は、自身がCOVID-19に感染したかもしれないという報告や相談、受診をためらわせてしま

い、かえって感染の拡大に繋がりがかねません。

歴史的にも感染症と差別・自己責任論は切っても切れない関係にあります。HIVはその存在が知られた当初は「ゲイ関連免疫不全」といった名称が使用されたり、「不道德な性行為による自業自得」や「奴らの問題」であり「私たちの問題」ではない」とHIV感染者を社会から排斥するような事態が起こり、それは今なお続いています。

HIVでは感染拡大防止のキャンペーンに「知るワクチン」という言葉が使われています。COVID-19でも「正しく恐れる」という言葉が使われることもあります。感染経路や予防に加えて、「新型コロナウイルスに感染することは他人事ではない」と知るとともに、パンデミックを乗り越えるために必要な知識だと思います。



12月1日は「世界エイズデー」です。国連のエイズに関する機関であるUNAIDS(国連合同エイズ計画)は、エイズに関わる差別解消に取り組んできた経験から、「COVID-19対策に伴うスティグマと差別への対応」というガイダンスを発表し「コミュニティ、職場、教育、保健医療、司法、緊急・人道支援の6分野」で取るべき対策を示しています。